慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トクヴィルをチチェローネとして……
Sub Title	Un aspect de la féodalité selon Tocqueville
Author	後平, 隆(Gohira, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.56 (2013. 3) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20130329-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トクヴィルをチチェローネとして……

後　平　　隆

序　二つのエピソード

二つのエピソードから始めよう。

デュシャトレ夫人はなんの躊躇いもなく家僕のまえで身に付けているものを脱ぎ捨てたそうだ。「家僕が人間であるかどうか、きちんとした証明がなされていないという理由から。」これはヴォルテールの秘書ロンシャンにまつわるエピソード。トクヴィルが『旧体制と大革命』のなかで紹介している[1)]。ロンシャン自身は「大貴族の奥方というのは下僕を自動人形としてしか見ていないのだと、私には判断できた[2)]」と、面前で入浴する夫人についてコメントした。たしかに「自動人形」が相手ならば、羞恥心を抱く必要はない。われわれ現代人は飼い猫のまえで脱衣しても恥ずかしくない。つまり革命以前の貴族デュシャトレ夫人にとって、家僕は現代の猫にあたる。これは 18 世紀フランスの話である。

二つ目は聖バルテルミーの虐殺事件のときのエピソード。時代はデュシャトレ夫人からさらに 200 年ほど遡る。1572 年 9 月 24 日の朝、フォブール - サンジェルマンに宿泊していたユグノー貴族ジョフロワ・ド・コーモンは、外の異様なざわめきと、大勢の武装した男たちの姿を目撃してびっくり仰天、郎党たちとパリ脱出を試みる。途中郎党の幾人かを失いながらも、命からがらフランス南西部ギュイアンヌにある領地の城に帰還した。それから彼は王

1）Tocqueville, *L'Ancien Régime et la Révolution*, la Pléiade, tome 3, p. 207.
2）同書、p. 1073. p. 207 の注 4.

シャルル９世、母后カトリーヌ・ド・メディシス、アンジュウ公アンリの三人に手紙を書いた。ところがその手紙、王たちの残虐極まるだまし討ちを糾弾する目的を担っていると思いきや、話はまったく逆で、自分の突然の出奔を詫びる文面らしい。16 世紀フランス史の研究者 A. ジュアンナ『聖バルテルミー　ある国家犯罪の謎』の記述によれば、当日の朝、王と母后の「手にうやうやしく口づけ」して暇乞いをする余裕もなく出発したジョフロワは、そのために二人が立腹しているのではないかと危惧した。カトリーヌ・ド・メディシス宛ての手紙はその釈明なのである[3)]。

舞台はナヴァール王アンリ（のちのアンリ４世）とカトリーヌ・ド・メディシスの娘マルゴー妃との結婚の儀式。パリに集まったユグノー貴族たちにとっては、ルーブル宮から発せられたユグノー首謀者殺害命令は、文字通り寝耳に水であったらしい。なにしろセーヌ河左岸に宿泊していた一団は、河を挟んだ王宮が尋常ならざる騒ぎにつつまれているのに気付くとすぐさま左岸空地に王救出に向かうための隊列を組んだ。王が襲撃されていると思ったのだ。

しかし襲撃の標的が自分たちだとわかるのに時間はかからなかった。ジョフロワ自身、一族がパリを脱出するにあたり犠牲者をだしたのだから、いったん安全な領地へ落ち着いてから王族へ送った手紙には憤激の言葉が連ねられてしかるべきところ。後世の人なら誰でもそう想像するだろう。ところが実際ジョフロワのペンから出てきたのは、糾弾ではなく、弁明の言葉だったという事情の背景にはなにが潜んでいるのか。なにを彼は怖れていたのか。その答えはシャルル９世に宛てた手紙にあると A. ジュアンナは言う。それによればジョフロワは、まったく冴えない姿で供回りもすくなく帰還した自分をみた人々が、それを王の不興を蒙った結果ではないか、と邪推することを怖れていたのだ。自分にたいする寵愛は以前と変わらないと「疑う余地を残さないしるしで」示してほしい、彼は王と母后にそう懇願している。不興を蒙るくらいならば、死んだ方がましだとまで言っているらしい。なぜそこ

3）Arlette Jouanna, *La Saint-Barthélmy*, Gallimard, 2007, p. 154.

まで思い詰める必要があるのか？　A. ジュアンナの解釈はこうである。ジョフロワにしてみれば、王と母后の愛顧と不興の両極のあいだにぶら下がっているのは、領地における彼の信望である。かりに寵愛を失ったら、信望は失墜する。一旦そうなれば彼に世話になった人や「友人」の忠誠心はたちまち消え去るだろう。なぜなら彼らの忠誠心を鼓舞してきたのは、彼らと王との間を取り持つジョフロワの仲介能力に他ならなかったから。王の愛顧をうけない領主は利用価値がない、つまり見捨てられてしまう。そのことを当の本人が誰よりもよく知っているのである[4)]。

＊

過去のさまざまな人や事象について書かれた本を読んでいると、ときおりどきりとするエピソードにぶつかる。本当はそれほど昔のことでなくても、また遠い異国の出来事でなくても、歴史は現在のわれわれには理解することがむずかしい事柄で充満しているのだけれども、通常われわれがそのことに十分な注意を払うことなく済ませているのは、今の生活感覚を過去に投影して、わかった気でいるからである。過去の世界に入り込むための、手段はともかく（外国語を学び、昔の言語を勉強し、本を入手することはできるだろう）、それに見合う努力を払うことのむずかしいわれわれには、昔の人もやっぱり今の人と同じように感じたり、考えたりしていたのだと思うしか手がないのである。ところがその安易な投影法が機能しないほど隔絶した出来事に出合うときがある。そうなるとわれわれの悟性は完全な混乱状態に陥り、唖然としながらつぶやくしかない、これはいったいどういうことなのか？　と。ふたつのエピソードは、まさに現在と過去を隔てる無数の溝のなかでも特大の、知的架け橋をかけないと越えがたい溝のありかを指し示している。想像をこえる溝をまえに、われわれは立ち止まる。そしてそれなりに確かだと思い込んできたわれわれの立脚点がじつは不動不変の基盤のうえにはないのだと知るのだ。時代考証が必要なのはテレビドラマを制作するとき

4）同書、p. 155.

だけではない。

家僕は人間という範疇以外の生物（「自動機械」といってもまさか生物でないとまでは思っていなかったろう）であるというデュシャトレ夫人にとって自明の理は、われわれの神経を逆なでにするし、自分を含むユグノー貴族を虐殺する指令を発した人に寵愛のしるしを懇願せざるをえないような政治システムは遙か彼方にあって、それこそ綿密な時代考証なしには理解できない。ふたつのエピソードが教えてくれるのは、良くも悪くもわれわれにとって自明な世界とはまったく異質な世界が過去にはあったという事実である。そこでは人間の姿をした「自動人形」が従僕として貴族に仕え、人々を結びつける関係は、その想像を絶したあり方によって、後世からの安易な類推を拒んでいる。

*

『旧体制と大革命』のはじめのところで、トクヴィルはなぜ行政関係の古文書を詳細に調べる必要があるかを説明して言う、「われわれは旧体制の法律下で生まれた人たちと日々出会っているのだから、旧体制はまだわれわれからはごく近いにもかかわらず、すでに時の彼方の闇のなかに没しているかのようである。旧体制からわれわれを隔てる大革命は、その徹底性によって、数世紀分の効果をもたらした。革命はそれによって破壊されずに残ったすべてを覆い隠してしまった。[5]」

トクヴィルはアーカイブを渉猟して、同時代（つまり革命後の 1800 年代前半）の諸々の現象は人々が思っているようには革命の結果ではなくて、旧体制下の諸機構の遺産なのだということを確信するにいたった。

ところでわれわれはこれからトクヴィルの下手な二番煎じをしようというのだろうか。しかしそのような古文書渉猟はほとんど夢物語である。ただ以前から試みてきたトクヴィルへのアプローチの一環として[6]、フランスの封建時代をかれの論考や、現代の歴史家の著作を通じて考えてみたい。渉猟で

5）前掲書、p. 74.

6）拙稿「ギゾー・福沢・トクヴィル」（1）（2）（3）。

はなくて逍遥、考究ではなくて気ままな散策。歴史家トクヴィルの研究ではなくて、かれをチチェローネにしてフランス封建時代を点描してみたいのである。デモクラシーは空気のようにわれわれを包んでいるわけではなく、ここにいたる茨の道は遙かだったと思い知ることになるだろう。

1.『アメリカのデモクラシー』に描かれた主従

貴族である主人とその従僕の関係をトクヴィル自身はどう考えていたか。それを知るための格好の文章が『アメリカのデモクラシー』（以下 *D.A* と表示する）第二巻、第 3 部、第 5 章の「デモクラシーは従僕と主人の関係をどう変えるか」にある。われわれの逍遥はここから始めよう。

D.A のほぼ全編がそうであるように、この章でも大革命以前のアリストクラシーのフランス、デモクラシーの支配するアメリカ、そしてアリストクラシーとデモクラシーが混在し、人民の精神がアナーキー状態に陥ったままの同時代フランスという異なる三つの世界が比較対照されている。トクヴィルが着目したのは主人と従僕とを結びつける精神的、感情的絆の有無、そしてその絆の性質である。

アリストクラシーでは主人と従僕とはまったく交わることのない平行線を描きながら、長い時間を過ごす。それは双方ともに当事者一代限りという短い単位では測れない時間である。何代にもわたる同じ家系の主人と従僕が同じ館で暮らしてきたし、これからも暮らし続けるだろう。主人と従僕との立場が入れ替わる可能性など、露ほども頭をかすめない。

「こうして、アリストクラシーでは、主人と従僕は生来の類似点をまったくもたず、それどころか財産、教育、考え方、権利は、両者を人間の等級において途轍もない距離においているにもかかわらず、時間の作用は両者を最後にはともに結びつけてしまう。積み重なる思い出を共有するうちに両者は離れがたくなり、どれほどちがっていても、互いを同一視するようになる。[7]」

7）Tocqueville, *De la démocratie en Amérique*, tome2, J.Vrin, 1990, p. 155.

互いを同一視するとは、つまり「主人は従僕たちを自分自身の副次的下位部分と見做すようになり、そして自己中心主義の最後の努力を払うことによって、しばしばかれらの境遇に関心を示すようになる[8)]」ことであり、従僕の方は「その極限では、自分自身に構わなくなる。自分自身に興味を失う。いわば自分を放棄してしまう、というかまったく主人のなかに身を移してしまうのである。自分用に想像上の一人物を創造するのは、このときである。彼に命令する人たちの富を満足げにひけらかし、かれらの栄光を自慢し、かれらの貴族身分で自分がえらくなったつもりになり、ある借り物の偉大さでたえず頭をいっぱいにして、しばしば偉大さを実際に体現する者よりも、それに価値をおく」ということである。

トクヴィルはこの事態を「二つの存在のこの奇妙な混淆には、なにかしら胸を打ってくると同時に滑稽なものがある」と評している。その滑稽さが感動的なのでも、感動的だけれども滑稽なのでもなく、感動的でしかも滑稽なのであるが、なぜその混淆をおかしく思いながらも、それに胸を打たれるのだろうか。

それはまさに過ぎ去りつつある時代にしか成立できない人間の交渉の濃密さをそこに見て取っているからに他ならない。自分の先祖たちもそうであった、また子孫たちもそれ以外であるはずがない、主従ともに抱くそういう確信は、言うまでもなく両者に自分は持続する時間の連鎖の一齣なのだという意識を植え付ける。それは神の摂理のなかで生きている、という安定した意識である。トクヴィルはその意識が羨望、怨恨、復讐というような人の品位を貶める感情から従僕を救っていると指摘して、「階級が下だからといって、その階級に属する全員が卑屈な心の持ち主であると想像してはならない。それではとんでもない誤りを犯すことになるだろう。いかに階級が劣るからといって、そのなかのトップにいて、しかもそこからの脱出を夢見ることのない者は、貴族的な立場（une position aristocratique）に身を置いているのである。彼はその貴族的な立場から気高い感情、傲然たる誇り、自身に対する

8）同書、p. 156.

敬意の観念を与えられるが、次にはそれらの観念が偉大なる美徳や並々ならぬ行為へと彼を誘うのである[9)]」と述べている。

アメリカインディアンが「貴族的」？

このように展開する論旨を追ってみると、トクヴィルが「アリストクラシー」を決してある特定の階級（貴族階級）に限って使用していないことがわかるし、われわれの連想もまたおのずから *D.A* 第一巻の最後の部分でアメリカインディアンについて彼が下した判断――「インディアンは、森で極貧のなかに暮らしながら、城塞に住む中世の貴族と同じ観念、同じ見解を持っている[10)]」――に導かれる。

ただしそのページには、旧体制下の従僕階級（la classe des serviteurs）と同様に、アメリカインディアンが神の摂理に安んじて身を委ねていたかどうかは書かれていない。トクヴィルがインディアンを貴族的な観念の持ち主として中世ヨーロッパ貴族とパラレルにおくことができたのは、彼らの価値体系に着目すればこそのこと。インディアンが奥深い森林を切り開いていく白人の旺盛な文明的営為に目を見張りながらも、白人がその成果を上げるためにとっている手段に軽蔑のまなこを向け、自分たちのほうが上等な存在であると信じるのは、「男にふさわしいのは狩猟と戦いだけ」という揺るぎない価値観のおかげである。アメリカインディアンの場合、彼らを貴族的観念の持ち主のようにみせているのは、彼らを駆逐して、滅亡に追いやろうとしているのが、より優勢な別の部族ではなくて、ほかならぬ白人開拓者であるからだ。白人開拓者、つまりデモクラシーの体現者の行動様式と対置されることによって、「狩猟と戦い」を至上価値とあがめる彼らの姿が高貴に見えるのである。

トクヴィルの同情がどちらの側にあるか、「連邦によって占領された土地に住むインディアン部族の現状と予想される未来」の章を読む者には明らかであろう。インディアンの不可避の行く末にたいするトクヴィルの惻隠の情

9）同書、p. 155.
10）Tocqueville, *De la démocratie en Amérique*, tome1, J.Vrin, p. 254.

は紛れもない。

従僕の名誉心

フランスの従僕階級に話を戻そう。その上位にいる者の心に、本物の貴族が備えるべき名誉心とパラレルな「一種の下僕の名誉心（une sorte d'honneur servile）」が萌すのは、代々主人の家系に生を受けた者はやがて主人になり、代々その従僕の家系に生を受けた自分が従僕であり続けるのは神の摂理によるという確信が、インディアンの価値観の場合のように、揺るぎなく双方を支配しているからである。

トクヴィルはそこに従僕の地位にいる人間の精神が、その境遇が予想させるようには卑屈に陥らない原因を探り出す。「なぜならば従僕たちは他の身分を知らないし、想像もできないからであり、彼らと主人との間に見られる途方もない不平等を、神の摂理のなんらかの隠された法則による必然的で避けがたい結果と受けとるからである[11)]」。

つまりトクヴィルはアリストクラシーの時代を、人々がこの世における不平等を神の摂理として生きていたがゆえに、厳然たる身分制の壁と不平等の固定化にもかかわらず、社会の各層に貴族的な魂の持ち主をみつけることのできる時代として描き出しているわけである。

時代の一面にこのような視点から照明を当てるのは、凡庸な精神には思いつかないアイデアではないだろうか。それは「偉大さ」を希求しないではいられない魂の悶えを悲痛なほど高い調子で妻に訴えた人にいかにもふさわしいアイデアではなかったかとわれわれには思われるのだが[12)]。

もっと「事実」を

しかしそれにしても、である。それにしてもトクヴィルが描いた主人と従僕の滑稽で感動的な「奇妙な混淆」は、デュシャテル夫人と彼女の「自動人形」と、なんとかけ離れて異質であることか。符合するところがまるでない。

11）前掲書 *D.A,* tome2, p. 159.

12）拙稿「ギゾー・福沢・トクヴィル（2）」に引用した手紙。

もしどちらかが本当で、どちらかが抽象にすぎないというのであれば、ロンシャンの話は恐らく本当で、トクヴィルの論は多分に眉唾ものであるしかない。歩みを進めるまえに、この点についてひと言。

トクヴィルの原稿では、この章の終わりに長い書き込みがある。そこに友人のルイ・ド・ケルゴルレと兄のエドアールが寄せた批評にたいするアレクシス自身の反応をみることができるのだが、それを読むと、まずルイ、エドワールともにアレクシスの分析に異を唱えている様子はない。ただ「ルイによれば、ぼくはアリストクラシー下の従僕の精神的条件を実際以上に悪くしているという。しかし彼は正しいか？[13)]」とあるだけ。ふたりとも基本的にはアレクシスの書いたことを是認していると思われる。

目をひくのは続く一節である。トクヴィルはおもしろいことを書いている。

> 同じ批判はより少ない程度であれ、この章全体に当てはまる。これは哲学的精神に気に入るように書かれている。並みの知性のレベルまでは落としていない。しかし主題自体は知的レベルの如何にかかわらず興味をひくはずだ。これはどんな読者でも読みたい気持ちになり、また読んで理解できると思われる章だ。したがってこの章をどんな読者にもわかるようにするか、あるいは彫（ほり）を深くしなければならない。そのためにはぼくがそうしたように長々と抽象的議論にとどまらずに、もうちょっと事実、実例、細部のほうに降りていくしか手はない。

どうも三人の言うことから判断すると、具体的事例が足りないことは認めているけれども出発点にある事実認識がそもそも誤っていると考えているふしはない。

たしかにトクヴィルが「もうちょっと事実、実例、細部」を挿入しておいてくれたならば、たとえ「自動人形」自身の筆が持つ真実味はなくとも、読み手の頭に浮かぶ疑問符の数は減ったかもしれない。おなじ原稿の先の箇所

13）前掲書、p. 159.

には、もっとアメリカの実例を使えばいいのに、という兄の感想にたいして、「具合の悪いことに、彼がぼくに言わせたいと思っていることを、ぼくはきわめて不明瞭にしか知らないのだ」という一節もある。おそらくトクヴィルには、アメリカについても提示できるほどの実例、いわば証拠物件の持ち合わせがなかった気配が濃厚である。

しかしもしそれを言うならば、*D.N* 二巻目のどの章についても同じことが指摘できそうである。それならばいっそのこと、トクヴィルの意図は事実の収集のよそにあったと考えるほうがいいだろう。*D.N* 二巻目の力点はアリストクラシーとデモクラシー（そしてまだデモクラシーへの途上にある革命的フランス）の対比による「抽象的議論」に置かれていることは明白なのだから。

トクヴィルが「事実、実例、細部」の渉猟に専心するのは、ルイ＝ナポレオン・ボナパルトによるクーデタ（1851 年 12 月 2 日）に衝撃をうけた後、『旧体制と大革命 *L'Ancien Régime et la Révolution*』（以後 *ARR*）執筆に取り掛かるときである。*D.N* 二巻目刊行（1840 年 4 月）から 12 年が経過した 1852 年の夏に、やがて *ARR* を構成する二章は書かれた。はじめに断ったように、われわれはトクヴィルを案内人にしてアリストクラシーの時代の人々がどのような関係を結んで生きていたかを点描する目的で歩き出した。それには「哲学的精神の気に入るよう」な書き方の *D.N* 二巻目よりも、過去の文書からくみ上げたデータ満載の *ARR* に即するのがより適当だろう。それがつぎのステップになる。「自動人形」と「奇妙な混淆」のどちらがよりよく実態を映しているか、判断はそれからにしよう。

2. 『旧体制と大革命』に描かれた主従

もちろん古文書館に籠ったトクヴィルの意図は逸話の収集ではなかった。したがって *ARR* のなかにロンシャンの話のような奇聞がばら撒かれているはずはなく、われわれの疑問に答えるようなお誂え向きの文章を拾い集めれば答えはおのずから浮かびあがってくる、という具合にはいかない。ただ

D.A では論議の対象になった貴族が、はたして都会に館を構え宮廷に出入りしている大貴族なのか、それとも地方の実力者なのか、あるいはまた田舎に小さな所領をもつ小殿様なのか、そのあたりがはなはだ不明瞭であったし、またいつごろの時代なのかさえよくわからなかった。たぶん 18 世紀の中ランク以上の貴族を思い浮かべながら読む人が多いだろうと推測できるけれど。それにたいして *ARR* で論じられる貴族は、貴族階級総体として数世紀におよぶ時間的経過のうちに登場していることはあきらかである。

最初に断ったように、われわれは歴史家トクヴィルの包括的研究をめざしてはいないし、ここから *ARR* を精読する余裕もないけれど、話を進める都合上、トクヴィルの封建貴族像を素描する必要はあるだろう。論点を貴族、封建体制、自由の三点に絞りながら、まずは彼の考えをできるだけ忠実に追ってみることにしたい。

フランス貴族とイギリス貴族の分岐点

フランス貴族の運命を考える最良の思考枠は、イギリス貴族の場合との比較によって得られる。トクヴィルといえばアメリカ、という連想が湧くけれども、こと貴族に関してフランスの事情を照射する光はイギリスから射してくる。これは当然のこと、アメリカは封建体制とは無縁なのだから。ところがつぎの一節を読むと、彼にとって自明な英仏の根本的な比較項目が、当時はじつに斬新な思考方法であったことがわかる。「近代のすべての国のなかでイギリスをこれほど特異な国とした事実、その法律、精神、歴史の特徴を理解させてくれる唯一の事実が、どうしてもっと哲学者や重要な地位にたつ政治家の注目を引いてこなかったのか、そしてついには習慣がイギリス人自身の目からもこの事実をいわば見えなくしていることに、わたしは常々驚いてきた[14)]」。

ではいったいその事実とはなにか。それはだれもが話題にするイギリスの議会、自由、公開性、陪審団のことではなく、「イギリスはカースト体制を、

14）*ARR*, p. 122.

変質させたのではなく、実質的に破壊した唯一の国である」ということ。イギリスにおいてのみ、ヨーロッパ封建体制成立当初にそうであったようなアリストクラシー（国の主だった人々全員による支配）への回帰が実現し、ほかの国では貴族階級はカースト（生まれ、つまり血筋がその標章）を形成しているというまさにそのことである。

トクヴィルはこの視点からフランス貴族の運命が傾いていった経過を理解しようと努めている。彼が提示する比較項目をいくつか挙げてみよう。

①結婚による血筋の交わりが可能か否か

あちらでは貴族と平民が一緒になって同じ問題に目を配り、同じ職業に就き、互いの伴侶を見つける。一方フランスでは、革命後 60 年を経てなお互いの結婚を避ける。（家族の猛反対を押し切ってイギリスの中流ブルジョワ出の妻を娶ったトクヴィルは、親友ケルゴルレには身分違いの結婚はしないように勧めている。）

② gentilhomme と gentleman

数世紀前からイギリスでは gentilhomme（gentleman という単語はこの語から派生、とトクヴィルは注意を喚起する）の意味が変わり、また roturier（平民）という単語はもはやないのにたいして、フランスでは語そのものは革命以来一般の使用から外れたが、なお狭い原義のままにカーストとしての貴族をさす。なぜそうなるか？　カースト自体が温存されたからである、しかも以前と同様ほかのすべてから切り離されたまま。肝心なのはその理由である、なぜフランス貴族は孤立した存在様態に固執するのか。そのこだわりがフランス貴族の帰趨を決定したというのが、トクヴィルの核心的テーマである。

③「開かれたアリストクラシー」と「閉じられたアリストクラシー」

国政の一翼を担う権利を奪われるのと比例して、貴族は従来の特権にいよいよしがみついた。貴族としての自尊心の支えをもはやそこに見つけるしか

ないくらい追いつめられていたからである。特権は血筋に結びつき、血筋へのこだわりはカーストを強固にする。

この点でトクヴィルはバークが現象を誤って解釈しているという。フランスでは金策に苦しむ王権による売官につぐ売官政策によって平民は容易に貴族に叙せられた。貴族になると税金免除などさまざまな特権を獲得できたから、富裕層は売り出される官職を争うように求めた。革命直前の財務大臣ネッケルの調査ではその官職数は4000！　バークはそこに自国イギリスの場合と同じく「開かれたアリストクラシー」の証をみて、それに賛辞を捧げたのであった。しかしトクヴィルの解釈はちがう。イギリスの「開かれたアリストクラシー」の場合、いつ自分がアリストクラシーの仲間に数えられるようになったかわからないままにそうなってしまっている。開かれている、というのはトクヴィルによればまさに境目が曖昧だということ。ところがフランスではカーストのメンバーはその数を数えあげることができる。そして昨日までの同じ平民仲間と新たに貴族に叙せられた人とは、特権というおぞましい溝によって分断される。彼はそれを「閉じられたアリストクラシー」と呼び、その埒外に取り残された平民の憤懣やるかたない心情を忖度している。じっさい「第三身分（le Tiers État）はその陳情書において常に貴族よりも貴族に叙せられた者にたいしていっそうの苛立ちをみせている。平民階級の外へと自分を導く扉をさらに開くように要求するどころか、扉が狭まることを求めてやまない。[15)]」

＊

資料を博捜するトクヴィルの脳裏には、フランス貴族階級が第三身分と分断され、特権の享受がもたらす幻影――昔にかわらず国の指導者であるという幻想のなかで孤立していくこの事態が刻みつけられ、ついにかれはその分断と孤立がフランス貴族の運命を決めたとの確信を深めた。おそらくそうい

15）同書、p. 128.

うことだったのではないだろうか。そう推察することを許すものに、たとえば『趣旨要約あるいは陳情書抜粋』について彼が残した読書ノートがある。これは革命の道程をも示唆する文章で、上に挙げた本文のもとになった考察としても重要なので、引用しておきたい。

> 第三身分が彼らを貴族階級へと導いてくれそうなあらゆる道を閉じるためにどんなにやっきになっているか、そしてまた貴族になることを熱望するどころか、叙任貴族たちを、たとえ破壊することが叶わなくとも、可能なかぎりその増殖を阻止すべき奇妙な有害動物としてしか考えていないことがわかるではないか。この見出しの中で言われていることを他所で表明されていることと合わせてみれば、第三身分が要求しているのは、要するに貴族階級の~~本当のことを言えばアリストクラシーさえの~~無条件の一掃だということがわかる。彼らは徐々にここに誘(いざな)われたのではない。最初の日から、そして革命突入以前もそれ以後もこのことを欲していたのだ。[16)]

コメント後半の棒線で消された部分に注目したい。もしアリストクラシーの無条件一掃まで行ったならば、それはデモクラシー実現要求そのもの、平等化あるいは平準化の要求である。しかし貴族階級の一掃だけならば、それは仏英貴族階級の分岐という文脈からみて、事はカースト打破にとどまるだろう。いちどは書き足した部分を棒線で消したのは、彼自身その違いに気づいたからではないだろうか。

イギリスとフランスの違い

なにが英仏の大きな差を生じさせたのか？

トクヴィルが注目するのは、イギリス社会に厳然としてある階級間の壁は、フランスのそれにくらべてはるかに高く、階級間の教養、考え方、暮らしぶ

16）同書、p. 1044。p. 128 の注 2 として収録された文中に引用されている。

りには明確な差があるにもかかわらず、人々はこと政治的利害に関するかぎり協同して事にあたるのが通例になっていること。ところが一方フランスでは壁は高くないし、18 世紀の末には「民衆より上に位置するすべての人は互いに似ていた。同じ考え方、同じ習慣をもち、同じ好みにしたがい、同じ楽しみに興じ、同じ本を読み、同じ言葉使いで話していた。違いは、もはや権利においてだけだった[17]」状況にもかかわらず、公共の課題に立ち向かう階級間の協同はなく、互いに孤立し、したがって互いのことに無関心だったことである。彼によれば各階級が互いに相互依存の関係にあると納得し合わないかぎり、イギリスで実現したような共通利害への共同参加はありえないのだ。

そうすると自国の不幸な歴史の根源を階級間協同の欠如にあり、と見極めた彼のつぎなる設問は当然こうなる、イギリス貴族階級を平民階級に近づけた要因とはなにか？

これについて彼が提出した答えは、拍子抜けするほど単純に聞こえる、いわくイギリスには自由があるから、と。では自由とはなにか？

「封建的自由」とは……

「自由」、この言葉に王、貴族、第三身分それぞれが与えてきた意味内容に踏み込むと、俄然話は込み入ってきて、われわれの逍遥は山登りめいてくる。登山準備をしていないわれわれとしてはあえなく登山口から引き返すしかない。そこでイギリス貴族階級に話を絞ってみると、英仏貴族階級の違いを対比させて述べた *ARR* 本文よりも（p. 135）、読書ノートの叙述がざっくばらんで面白い。ちょっと長いけれど、引用したい誘惑にかられる。

> 政府は支障なく行動できなければならない、しかし被統治者のためだけに行動しなければならないのだ、などと言うひとがいる。冗談ではない。そんなことが言えるとは、人間は、王でも貴族でも、いつだって自

17）同書、p. 121.

分の義務としてあるものではなく、情念のおもむくままに利益を追っているのだということを忘れているのではないか。集団として彼らをみれば、その善良さが発揮されるのは、結局のところ、彼らが善良であることを必要と感じるその度合いに応じてでしかない。アリストクラシーが民衆に近づき、手心を加えるのは、民衆を必要としているときに限るし、その必要を感じるのは自由な政体が存在しているときに限るのだ。／もし議会がまったくなかったとしても、イギリスのアリストクラシーがその門戸を開き、民衆の権利を守るために尽力したであろうと思っているとしたら、とんでもない間違いだ。イギリス貴族ほど生まれつき尊大で、排他的で、しばしば容赦ない貴族はどこにもいない。そのことは彼が大衆抜きですますことのできている事柄をみればよくわかる。この鋼鉄を柔らかくし、たわめたのは政治的自由だ。（……）イギリスにはアリストクラシーがある。フランスには貴族階級があった。一方は「属」であり、他方は分離可能な「種」だ。この着想を敷衍すべし。[18)]

この着想を敷衍すべし……この最後の一行は、トクヴィルがこのノートの線上に展開できる着想をえたのは、*ARR* を書き進めながらだったことをうかがわせる。自由政体があるかないか、つまり国全体にかかわる課題をめぐって対立する利害を調整し、妥協案をみつける場としての議会があるかないか、そのことがその後の仏英両国の岐路になったのではないか。そこにフランス貴族衰亡の根本原因が見つかるのではないか。

彼の頭のなかに走った閃光とは、そのようなものだったのではないだろうか？　そう推論することを許すこのノートはとても興味深いと思われるのだが。

歴史の転回点

フランスに話を戻そう。

18）同書、p. 1047 に p. 135 の注 2 として引用。

貴族、平民両階級相互の無関心、ことにカースト化した貴族たちの国家利害への無頓着。いったいどんな力が働いてフランスではこうなってしまったのか？　どのような歴史的経緯がそこにはあったのか？　まさにこれが *ARR* 全編においてトクヴィルが追及した課題にちがいないけれど、いま彼の調査、推論の足跡をくわしく辿る余裕はない。しかし 15 世紀にシャルル 7 世が三部会の同意なく la taille（タイユ税。代表的な直接税）徴収に踏み切った時点こそ歴史的転回点になったと、彼が見定めていることだけは指摘しておきたい。このときに貴族領主層は「卑劣にも第三身分が課税されるのを黙って見過ごした」のである。いわば貴族は自分たちが課税を免れるならば（あるいは免れるために？）第三身分を王の生贄に捧げたのであった。『回想録』（1489 ～ 1498）で有名なフィリップ・ド・コミンヌ[19]がすでにこの出来事に最大限の重要性を認めて、王は「その王国に傷口をこしらえた。傷口からは今後も長期にわたって血は流れつづけるだろう[20]」と書いたその見識にトクヴィルは敬意を払っている。トクヴィル著作集第 3 巻所収のかなりの分量の読書ノートを丹念に読んでいるうち、次の一節に出会った。なぜ彼はタイユ税課税が画期的であったと考えるのか。

> 傷口からは 1789 年まで血が流れ、閉じたとしてもそれはまた別の傷口をひらいていっただけで、そこからは血が迸った。この権力者のなんという慧眼。無節操な人間ながら、封建的自由が絶対政府へと変わる移行期に身を置き、絶対政府をかなりの程度に観察し、また封建的自由についてもそれなりのイメージを保持しているので、そのあと専制政治が猖獗を極めた時代に生まれた偉人たちにもまして、自由体制の利点と絶対政府が本来持っている抑えがたい欠陥をよく判断している[21]。

なんといっても目を引くのは、絶対王政がその足固めをする過程で駆逐さ

19）フランドルの貴族。ルイ 11 世以来三代にわたる王の顧問官を務めた。
20）同書、p. 136 にコミンヌからの一節が引用されている。
21）同書、p. 1046 所載の p. 136 の注 1.

れていったのが封建的自由であると認識されている点である。いっぽうはともかくも望ましく、他方はまったく望ましくない、と。トクヴィルによる善と悪の色分けは、だれの目にもあきらかだろう。

では彼は「封建的自由」という言葉でなにを指しているのか。そしてそれが王の専制への意欲によって圧倒されていったのはなぜだろうか。おおまかに指摘すれば、「封建的自由」とは、王への権力集中の企てに反抗する領主層がそれぞれの所領で奮ってきた権力をさし、またそれが圧倒されていったのは、貴族が所領を離れ町に住むようになったからである。町とは、もちろんパリのこと。

ただしそうはいってもトクヴィルが「封建的自由」は相対的には望ましいのだと考える具体的な根拠を著作集から見つけ出すのは容易ではない。もちろん領主がどんな権利を行使し、権限を奮っていたかは書いてある。その「droits féodaux（封建的権利）」として彼が列挙している項目――それが封建体制の実質をなす――を挙げてみると[22]、領主のための賦役、通行税、定期市税、狩猟独占権、鳩舎と鳩を唯一保有する権利、麦を挽くのは領主の製粉機、葡萄を絞るのは領主の圧搾機に限ると農民に強いる権利、土地移転税（農民が保有地を売却した場合に領主に支払う賦課租税）、農地に定額地代（cens）、地代（rentes foncières）を課す権利、現金と現物による小作料（redevances en argent et en nature）とあり、これを見て思わず唸らない人は少ないだろうと思われる。自由？　これだけの無茶苦茶な権力行使が横行していた封建体制のいったいどこに自由があるというのか？　しかしこういう感想を抱く人は、そうと意識しないままに農民の立場に寄り添っているのだ。けれどもかりに自分が領主であるなら、こんなにいいことはないだろう。

それではトクヴィルは領主の立場から封建体制をみているのか？　もしこんな質問がでたらば、そのとおりだと答えるしかないだろう、ただし「封建的自由」というとき彼の思考の枠内にあるのは「領主 vs 農民」という対立項ではなくて「領主 vs 王権」なのだと付け加えながら。そして「封建的自

22）同書、p. 77.

由」と前述したイギリスの「自由政体」とは、「自由」という単語以外、まったく別物であることは言うまでもない。

「封建的自由」をめぐる闘争

フランスの歴史を政治の観点から概観するなら、それは封建領主層が振るっていた権力を王権が蚕食していく過程だといえる。当然さまざまな争いがあり、思惑が入り乱れ、激しい抵抗があった。しかし歴代フランス王と有力貴族たちとの長年にわたる国の主導権争いが行き着いた果てには、ヴェルサイユ宮殿が豪壮な姿を現し、そこはルイ 14 世による絶対王政の舞台となった。そこにいたるまでの画期的な事件――たとえば聖バルテルミーの虐殺、アンリ 4 世の暗殺、フロンドの乱など――については、フランス内外にその時代を専門とする歴史家が何人もいて、たくさんの論考が発表されてきた。「領主貴族 vs 王権」というテーマもそのひとつ。代表的な研究書を指折り数えてもいくつかあり、その一端を覗いただけで、各時代における展開の複雑なありさまに目を奪われてしまう。

*

これまでトクヴィルの *ARR* をベースに、貴族階級の変遷をキーワードとしながら、彼が封建時代からつかみ出した特徴を垣間見てきたわけだが、この逍遥の最後にもういちどジョフロワに登場してもらい、彼が王に宛てた手紙の“奇妙な”文面が、当時彼をそのひとりとする貴族階級のある層が置かれていた状況を如実に反映し、じつに理に適ったものであったわけを理解してみたい。つまり「領主貴族 vs 王権」という主題の 16 世紀的展開に照明をあて、さらにそこに浮かぶ光景のなかにトクヴィルが描く貴族階級をおいてみたいのである。冒頭にあげた『聖バルテルミーの虐殺』の著者が別の著書『反抗の義務　フランス貴族と近代国家経営、1559–1661』[23] でこの問題を深く掘り下げていて、さまざまなことを教えてくれる。

23）Arlette Jouanna, *Le devoir de révolte : la noblesse française et la gestion de l'État moderne, 1559–1661*, Fayard, 1989.

「反抗の義務」

なぜジョフロワにとって寵愛の持続を「疑う余地を残さないしるしで」示してもらうことが死活の問題であったのか。それは王と貴族、双方の勢力争いの天秤にかけられる王の分銅が、貴族のそれと釣り合っている状態をこえて、相手の分銅を浮き上がらせ自分の分銅が沈んでいく状況が出現していたからである。これは意味の薄い比喩ではない。じっさい膨大な数の配下を動員できる実力を背景に、意気軒昂として王権と張り合うことのできていた大貴族を別にすれば、ジョフロワ程度の貴族は、自分の地方においてその配下の中小貴族たちからまさに天秤にかけられていたのである。

もともと貴族身分とは、「ありふれた仕事がもつ人間性疎外の性質を嫌い、無為とは似て非なる余暇という特権――それは戦争、狩り、賭け事、ダンス、精神修養、王の相談役、領地の耕作地化など、高い価値をもつとされる活動に専心することを可能にしてくれる――に魅せられる集団的理想の表現であり、貴族の血統にその理想は具現されているのだと好んで考えられた。[24)]」

アルレット・ジョアンナによれば、16 ～ 17 世紀フランスの政治構造の多くの面は、そういう理想のなかに生きる貴族の世襲財産と規定できるという。たとえば公私混同は毎度のこと、権力は個人財産として利用され、主君への服従は自分および一族の忠誠心として理解された。大貴族から群小貴族にいたるまで、貴族たちはおしなべてこの世襲財産を基盤にして、自尊心を高め、独立不羈の精神を涵養したのであり、またそうであればこそ彼らは「王にたいしてかなり自由」に振る舞えたのである。地方における有力貴族の権力は、支持者との絆および互恵にもとづく“友好”関係にある貴族たちの数で計測できる。「地方で領主がどのくらい“信望”を得ているかは、その“友人”の数をみればわかるし、またその数は領主が提供できるサービスの規模に左右され、そしてその規模自体がまた領主の人間関係、親類縁者、財産の多寡、彼の家系が博している名声次第なのである」から、貴族の“信望”は「その大半において王の制御が及ばない家族の世襲財産なのである。[25)]」

24）同書、p. 21.
25）同書、p. 34.

これはジョフロワの行動の背景にある事情を浮かび上がらせてくれるなかなかおもしろい記述である。要点はなにかといえば、

1）貴族が発揮する権力は、公権力（のちにリシュリューが彼ら貴族にわからせようと腐心する“国家理性”に立脚する王権[26]）とは異質の“世襲財産”であること。

2）その権力基盤の有力な一つが“互恵”を条件とする“友人”との関係であること。つまり“友人”と良好な付き合いをするためには、恩恵を施さなければならないし、“友人”が主君に尽くす“忠誠”はその見返りであって、“服従”ではない。“互恵”関係は同等レベルの貴族同士のあいだでも同様である。

3）そこに成立するネットワークが“信望”を保証すること。

4）こうして構築された血統の“信望”が厚い場合、貴族は王権にたいして「かなりの自由」を維持できた。またここに成立する関係は、王↔大貴族、大貴族↔中貴族、中貴族↔群小貴族と、各レベルで縮小再生産される。つまり“友好”関係にある貴族間では、たとえどんなに地位、富、家柄においてひらきがある場合でも、「各貴族は信望の及ぶ隣人、親戚、友人からなる小なりといえども独立したネットワークの中心にいるかぎり――グベルヴィルの領主のようなしがない田舎領主のケースでさえ――、彼は自分を最大貴族とおなじく自律した（といっても、あらゆる程度の差に目をつぶったうえで）存在にする権力を手中におさめている。[27]」

「信望」をめぐる攻防

ではもし4）にあるように、“信望”が貴族の自主独立を保障してくれるならば、なぜパリの虐殺を逃れ、無事に領地まで帰還したジョフロワは首謀者である王族に懇願（哀願？）の手紙を書かなければならなかったのか。もしこの疑問が湧いたときは、“信望”は施す“恩恵”の対価で、二つは表裏

26）この点に関しては、マイネッケ『近代史における国家理性』第一篇第6章「リシュリューのフランスにおける国家利害論」が参考になる。

27）『反抗の義務』、p. 70.

一体の関係にあることを思い出さなければならない。そしてジョフロワのケースでは、“恩恵”のさまざまな中身のなかでも、王宮が貴族懐柔のために繰り出す特権付与、官職供与などを、自分のネットワーク内にいる支持者のために仲介役となって取り付けることであった。

もしこの事態を別の角度からみてみるとどうだろうか。自分の意のままに手繰れる“恩恵”には限りがあるだろう。もしそれで不足ならば、さらに上位の貴族の与える“恩恵”の仲介役になることで自分のネットワークを維持するしかない。この関係をどんどん上位にあげていった果てにいるのは、王ないしは王に比肩する王族や若干の最大貴族である。したがって自分に権力を集中させたい王の思惑はといえば、それは、直接委任した地方長官を可能な限り広い範囲に派遣し、自分こそが最大の“恩恵”供与者であることを見せつけながら、地方貴族が営々と維持してきたネットワークを食い破っていくことにある。そして貴族が自らの領地の統治に関心を失い、地盤を離れてパリに居住し、やがてヴェルサイユ宮殿に部屋をえて王の謦咳に接することこそが貴族として望みうる最高の名誉であると考えるようになったとき、王権の息の長い思惑はついに実現したといえる。

トクヴィルが *ARR* で調査追跡したのは、まさにこの過程であり、またこの過程がやがて自壊への道に変貌し、その先に革命が待っているしかなかった自国の歴史であった。また「反抗」とは、貴族が構想する「封建的自由」に基礎をおく国家統治とは別の論理を押し付けてくる王権にたいする反抗であり、具体的には当然それは三部会開催の度重なる要求となってあらわれた。なぜならば三部会では各地からの陳情書が寄せられ、各階級が国政に関して意見を述べることができたからである。つまり共通利害に対する協同がそこでは実現し、王が専横へと傾くのをけん制できた。したがって「封建的自由」の無化を図る王の間違った企図に対する「反抗」は、国政上では「義務」となると考えられたのである。ここでわれわれはシャルル 7 世が三部会での承認を経ないでタイユ税を設けたことが歴史的転回点となったというトクヴィルの意見を思い出し、そして 1614 年の三部会を最後に、ルイ 16 世

が 1789 年にふたたび招集するまで、王は各階級から意見を徴する場を必要としなかった理由に思いを馳せなければならない。

『反抗の義務』にはさまざまな要素が複雑に絡みあう「封建的自由」と王権との積年の攻防が詳述されていて興味が尽きない。そこでふんだんに紹介されている王にたいする「かなりの自由」が発揮されたエピソードや、当時貴族間で取り交わされた手紙があかす“友愛と信望のネットワーク”とか“clients（支持者・顧客）”形成への努力とか、そういうもろもろの事情を知った目で *ARR* を読み返してみると、王権に反抗する貴族のそうした闘いへの目配りを欠いたトクヴィルの封建貴族論の特徴がよく見えてくる。もちろん現在の研究者がアクセスできる資料と 150 年以前の古文書館で読むことのできた文書とは違うだろうし、またわれわれは下世話で言うように、他人の褌を借りてトクヴィルに欠如しているものをあげつらう愚を犯したいのでもない。ただ *ARR* でのトクヴィルは、貴族の「反抗」とまったく違う問題を自分に設定して、それに答えようと努力したのであり、その結果として現在われわれに残された著作が出来上がったといいたいのである。

3. アリストクラシーの名残り

トクヴィルをチチェローネとするフランス封建時代散歩もそろそろおしまいである。散歩はあくまでも散歩、山登りではない。いずれわれわれも優秀な案内人の足腰についていけるようにトレーニングを積んで出直すことにしたいが、しかし彼が「前々から言わなければと思ってきたこと[28)]」を見落としたままおしまいというわけにはいかない。彼の心に適う、というか彼の心に懸かかっているのは、ほかでもない、「反抗」する封建貴族の気概が、それだけが革命直前まで残っていた唯一のアリストクラシーの名残りだということである。

28）*ARR*, p. 1050, p. 143 のノート *a*.

階級の区別、個別の特権、小さな社会的まとまり、これらのことは虚栄心を助長し、協同への意欲を殺ぎ、国民を慢性的に分断する政策によって政府が支配者になることを許してしまったが、それと同時に、個々人の自尊心と自分は価値ある存在だという感覚――これこそは独立不羈の精神がそこに根を下ろす感情である――を多くの人がもつ支えとなった。こうした事情は集団の弱体化を招いたが、しかし個人には活力を与えた。卓見！これは正しい考え方だ。

彼はルイ＝ナポレオン・ボナパルトの独裁体制が定着していく現状をさしたる抵抗もなく受け入れてしまう情けない国民精神の地模様を目の当たりにしつつ *ARR* を書き継いでいる。このメモは、もしもその地模様に貴族的精神の刺繍がほどこされ続けていたならば！　と長大息をもらすトクヴィルの様子を彷彿させる。さきに平民階級へのタイユ税課税を見逃した貴族階級の身勝手さを指摘したトクヴィルは、ここではその独立不羈に着目しているのだ。自ら「卓見！」と叫んだこの着眼が本文では次のように結実する。

貴族たちはかっての権力を失ったなかにあっても、父祖たちの自尊心――規律の敵、しかし同様に隷従の敵でもあったその自尊心のいく分かを保持していた。（中略）

37年間の代議制度のあいだ[29]、権力の濫用にたいしてわれわれが所有していたほとんどすべての保証は、貴族階級によって声高く要求されたのである。その陳情書を読む者は、かれらの偏見と悪癖のただなかに、アリストクラシーの精神と大いなる美質のいくつかを感じとる。貴族階級を法の支配に服させるかわりに、打ち倒し、根こそぎにしたことを人々はいつまでも悔いることになるだろう。国の実体に不可欠な部分が奪われ、自由には金輪際癒えない傷がつけられたのである。[30]

29）ナポレオン失脚後、ルイ 18 世の復古王政以来を意味していると思われる。
30）同書、p. 145 ～ 146.

これはまさにトクヴィルの貴族階級に対する考えを凝縮したページである。歴史的には功罪こもごもいたる貴族階級、しかし自由への弔鐘が耳にとどくばかりの今となっては、革命直前の陳情書に痕跡を残す「アリストクラシーの精神と大いなる美質」の消滅のほうがトクヴィルの胸にこたえるのだ。それを痛惜するかれの心が長い隷従の道への展望をまえに暗い憂愁に閉ざされているさまを、このページを読む者は感じずにはいられない。

絆は想像の産物？

デュシャテル夫人の「自動人形」に戻って締めくくりとしよう。

じつはトクヴィルはこれを貴族が平民に抱いていた途方もない侮蔑感情の一例として挙げていたのであった。しかし考えてみれば、これは「父祖たちの自尊心」――傲慢で制御しがたいまさにそのことで隷従化への歯止めの石となった自尊心の延長上にある感情ではないのだろうか？　もしそうであるならば、人を人と思わせないこの度し難い侮蔑をも「アリストクラシーの精神と美質」の裏に貼りついて剥がれない感情として甘受しなければならないのだろうか。

結局トクヴィルが *D.A* で描いた主人と従僕の感動的で滑稽な絆は、昔はありえたかもしれないと想像された物語にすぎないのか？　あるいはアリストクラシーとデモクラシーとの思弁的比較の必要に応えただけのものだったのか？　トクヴィルが残したページから（膨大な量の手紙はその一部にしか目を通していないけれど）、主従関係の実話を探し出すのはたぶんそう簡単ではない。しかしもしかしたらトクヴィルの家系では *D.A* のそれに似た絆があたりまえのように成立していたのかも知れないし、あるいは彼はそのような話をよく見聞きしていたのかもしれない。それになにしろ数百年にわたるアリストクラシーのことだから、どの時代の、どの場所に、どんな主従関係が存在したことやら、たしかにわかったものではない。昔の逸話集がほしいところである。

グベルヴィルの殿様

しかし最後に紹介するジル・ド・グベルヴィルのエピソードは本当の話である。さきにネットワークの中心にいる貴族はみんな自主独立の権力者であるという話題のとき、ちらっと姿をみせたグベルヴィルの小貴族（gentilhomme）。これはじつにまめな人で、家計簿・日記（livre de raison）を生涯書き続けたが、そのうちの大半は失われ、わずかに 13 年分だけが残った。しかし残された分だけでも、400 年前のノルマンディーの田舎コタンタンで展開された領主の生活を知るためのかけがえのない資料として重宝されている。コタンタンがトクヴィルときわめて縁の深い地である点も興味を増すだろう。

われわれが『グベルヴィルの殿様』という本のなかに見つけたそのエピソードとは、次のようなものである[31)]。使用人のひとりマルタン・ビレットは殿が館を留守中、足に水車（風車？）小屋の碾き臼を落として大けがをした。事故のおきた日に、殿は帰宅の途上。一日の用件を済ませ疲労困憊のまま、30 キロの道を急いだ。途中一息つくために休憩、そして夜の 9 時ごろには館まであと 20 キロの町まで来て宿泊しようとする。ところが市（いち）に行く商人で空いた部屋がない。仕方ないから夕食（souper）をとり、馬を休ませて、真夜中に出発。こうして 13 日間の旅のあと、その日は 80 キロの行程をこなして、やっと明け方 3 時に館に戻ってみたら、そこにはつぶした足に包帯を巻いてもらっているマルタン・ビレットの哀れな姿。殿は包帯を替えるのを見届けたあと、疲れてぼろきれになった体に 2 時間の仮眠を許し、それからヴァローニュ（トクヴィルの読者にはなじみの地名）にむけて出発。ヴァローニュでは「飲まず食わず」で午後の 3 時に髭剃り人（barbier）[32)] を連れてもどった。しかし殿の献身的行動は報われず、彼の使用人は二日後に死んだ。

31）Madeleine Foisil, *Le Sire de Gouberville*, Aubier Montaigne, 1981, p. 224–225.

32）傷や骨折もみた当時の外科医。

この日記の記述からたちのぼるグベルヴィルの殿様のなんというぬくもりとやさしさ！　たしかに従僕を「自動人形」としか見ないデュシャテル夫人とは時代もちがえば、貴族としてのランクも違う。それを認めた上でも、なお二人を隔てるこの距離の大きさ！

もしかしたらここにあるのは、トクヴィルが哀惜してやまないアリストクラシー時代の主従を結んでいた絆の雛形なのかもしれない。